

教祖140年祭
三年千日の
活動方針

「教祖のひながたを目標に
全教会心定めの達成」

◇立教188年 こどもおぢばがえり◇

開催期間 7月27日(日)～8月3日(日)

笑顔あふれる親里の夏

少年会網走団

おぢばで楽しい夏を満喫!(≧▽≦)

※9月月報にて「こどもおぢばがえり特集」掲載予定!



大教会のHPがご覧になれます!

月報には掲載されない写真もいっぱいです!

ぜひ一度ご覧下さい♪

網走月報

発行所
天理教網走大教会
布教部出版広報掛
〒093-0073
網走市北3条西6丁目
TEL 0152-43-2227
FAX 0152-44-2227

大教会七月月次祭

大教会7月の月次祭は、12日午前9時30分から大教会長祭主のもと、執行された。

大教会長は祭文で、親神様の御守護に御礼申し上げた後、「今月末より、いよいよこどもおぢばがえりが始まります。網走大教会に繋がる子供達も二十七日より八月二日までの日程でおぢばがえりをさせて頂きますので、大勢の参加者

と共に、本年も無事に終えさせて頂けますようお願い申し上げます。私共教会長を始め用木一同は、教祖百四十年祭まで残り半年あまりとなる大きな時局に、論議の実働に一層力を入れ、今できること、今日できることを精一杯勤めさせて頂く所存でございます。」と奏上した。

代真柱様より「布教する心でつとめて頂きたい」とお言葉を賜り、そのお陰で教育学や心理学を学んだ経験のない私にでも出来るのではないかと思います。現在は、天理高校の副校長という役割を頂き、3年間つとめさせて頂いております。特別に長けたものがあるわけではない私がつとめさせて頂けたのは、親神様の御守護・教祖のお導きは勿論のことですが、教えがあり、ひながたをたよりに歩む事の大切さを、その時々でお聞かせ下さった三代真柱様、さらに現真柱様の御言葉のお陰です。また、これまでお世話になった先生方からお導きがあったからだと思います。

婦人会 みちのだい育み塾



長谷 幹夫 先生

私は、玉ねぎ畑に囲まれたのどかな淡路島にある教会で、

八人兄弟の六番目四男として生まれました。父からは幼少の頃より、教祖のよふぼくとして布教する事の大切さ、将来は兄弟姉妹全員がお道の教

えを伝える役割を担うように聞かされて育ちましたので、高校より、お道の子弟育成の為の学校である天理教校附属高等学校に進み、更に天理教校第二専修科で五年間おぢばに伏せ込ませて頂きながら、教理を学び実践する機会を作させて頂きました。

私が、教育の場で御用させて頂くきっかけになったのは、天理高校一部男子寮である天理学寮北寮ふしん寮で幹事をさせて頂いた事です。幹事として勤めさせて頂く際に、三

先日私の集談所の月次祭で子供に「おつとめが始まるから」と声をかけましたが、2階にいる子供は降りてこずにトイレにこもっている。またもう一人の子供は、クラブに行つて遅れて帰って来る。いつもなら、「したい事ばかり

くされる事が多かったと感じています。長期休みのたびに教会裏の広大な土地の草刈り。また、信者さんと共に朝から夜までの大工仕事。他の兄弟には言わない事も言われ、その時は何故？ と父は自分の事が嫌いなのだと思うほどでした。しかし、北寮での生活で父から教えられた草刈りから大工仕事が大いに役立っています。恐らく私に将来困らないように力をつけてくれたのだと親心を感じ感謝しがあります。

私たちは育成する上で、子育てでも同じだと思いますが、どう見られているか、思われているかをすぐ気にします。それゆえに嫌われる事は出来るだけ避けたいです。だから言いたい事も言えずにいる事もあります。言わなければ、本当は優しいのではなく、自分に優しい人である事に気づきました。自分が辛いのが嫌だから。嫌われる事を言いたくないのです。自分が辛いのが道を選ぶのか？ 子供の為に自分が辛くなる道を選ぶの

か？ この後者は、その子の事を本当に心配しているから行動に移す事が出来るでしょうし、子供は自分にとって必要な事を教えてくれていたと気づけば感謝すると思います。子供は親が本気で自分に向き合ってくれている姿勢を見ているように思います。

もう一つ言えば、伝える側である私たち大人の日々の行動や発言も問われます。『人には言うけど自分はしない』とか『言う事としている事が違っている』のでは説得力にかけます。普段から聞いて貰える様な関係性を持つ事も大切です。

ここまでは「育てることは育つこと」についてお話ししてきました。ここからは「育つことは育てること」についてお話させて頂きます。

「育つことは育てる事」というのは、例えば、ふだん子供にはガミガミ小言を言ったり、ダメ出しばかりする自分がいることによつて、「ガミガミ」が優しい言葉に変わったたり、「ダメ出し」が良い部分を認

めるようになったりします。すると、相手である子供の自己肯定感が高まり、のびのびと良い価値観のもとで考え行動するようになり、子供自身が自ら学ぼうと意識していくようになります。つまり、『こちらが変われば相手が変わる』という事です。こちらが良い価値観をもった人間に育てば、相手も自然と、こちらを慕ってくれるようになります。こちらの迷惑を前面に出して、「相手を変えなければならぬ」とか、「言わなければならぬ」となりがちですが、まずは「神様がその方を通して、私に何をお示しになっているのか」を考え、その事を我が事と受け止めて相手の立場に立って考えてみる。そんな心の持ち方が大事なのではないのでしょうか。

相談があった場合、ついつい責めるつもりはなくても、相手を追い込み責めてしまい、人間関係を崩してしまう事もあります。そうならない為に、ほこりの混じっていない真っ白な心で向き合う事が大切だと思います。

こちらの心が澄み切れば、何事も喜べるようになります、言葉を荒げたり、相手を非難することもなくなります。こちらの心が穏やかであれば、相手も穏やかに接してくれるでしょう。心を低くし、丸い心で接することが、人と接する場合、一番大事なことだと思います。

三代真柱様は、北寮幹事制度発足にあたってのお言葉の中で、「皆さん自身が日々育つてもらふ努力をすることが、直接生徒に映って行くことになつてほしいと、かように考へるんです」と、幹事をつとめる者の心の置き所について御言葉を下さいました。

相手が生徒であれ、我が子であれ、いずれにしても相手に何か求めるならば、その求めている事を、まず導く側が実行できているからこそその説得力であり、相手にも伝わるのです。

おふでさきに、
なにゝてもむねとくちとが
ちこふてハ 神の心にこれ
ハかなわん 12号133
と教えて頂いております。
言う事と思つている事、言

う事と行動が伴わない事は神様の御守護を頂けないという事だと思ひます。つまり「人に求めるよりも、まずは自分が育つ努力を」と、教えて頂いている様に思ひます。

青年会長様である大亮様に、これから生徒指導する幹事さんに対して、「求める」の「も」を「み」に変えてみてくださいと聞かせて頂いた事があります。つまり「求める事」を減らし、「認める事」を増やす事で相手が成長していきま

天理高校創立百周年の記念式典において、真柱様は、「育てば育つ、育てにや育たん」（明治24年3月23日）また、「道に外れたる心で育てようと思うた處が育たん」（明治33年1月4日）というおさしづのお言葉を引用された上で、「人を育てるには、育てようという強い意志がなければ始まりません。そして、何よりも、育てる者の心の置き所が問われます。どのような人に育てようとしているのか、何を伝えようとしているのか、はつきりしな

優先して、しなければならぬ神様の事を後回しにするなら、したい事をさせないぞ」と言いそうなら腹が立つていたのですが、『いやいや待てよ。私が腹を立てている事は教祖は望んでおられないし、「しなければならぬ」と強制してさせても、本人が「させていたきたい」と納得がなければ反発するだけで子供に自分の信仰を押し付ける事になつてゐるな』と思ひとどまりした。

真柱様は婦人会第一〇七回総会でのメッセージで、「育てよう、丹精しようという相手が思うようについてきてくれないときには、相手をどうこう言うのではない。まずは自分の通り方、教え方、導き方に、届かない点はなかったらどうかと謙虚に見つめ直し、改めるべきところは素直に改めることを心がけてもらいたい。そして何より、自分自身がこの道を通ることに自信と誇りを持つていただきたいのである。』とお聞かせ下さいました。改めて自分自身がこの道を通ることに自信と誇りをもつて通る事の大切さに気が

付かせて頂き、真柱様の御言葉に胸に治める事ができました。

また、三代真柱様が私どもの教会に御入込み下さつた時の御言葉で、「私たちの先人たちは、にをいがけ・おたすけがしたくて、にをいがけ・おたすけにかかつたのではありません。本当は、救けてほしかつたんだ。自分が救かりたかつたんだ。その方法を教祖に問うたら、教祖が、「人を救けなさい」と仰つた。それを真に受けて実行しただけなんですよ。そうでしょう。そうしたら人は救かるわ、人が救かるだけじゃなしに自分もその間に救けて頂いてゐるという事に気がついた時に、なるほど教祖の仰つた事はこれなんだと。『人救けて我が身救かる』というお言葉は、これなんだというので、それからもう自分が救かりたいという気持ちはどうでも良うなつて、救けさせてもらおう、救けさせてもらおうという気持ちの方を強く持つて、ぐるぐるぐるかけずり回つたのが、今日の私たちの先人なんです。』と聞かせて頂き

ました。

「救けて貰いたい」から「救けたい」に心が変化し、主体的に信仰された先人の信仰姿勢を考えた時に、代を重ねた私は、信仰活動を「やらなければならぬ」になつてゐる事に気づき、それでは子供は主体的に教えを学ぼうと思わなしいし、させて貰おう！ と積極的にならないように思い、冷静に子供と向き合い話をする事にし、まずは自分の考えを押し付けないようにしました。それは子供が自発的に神様と対峙してほしいと考えたからです。私が子供に伝えなければならぬのは、信仰のよろこびであつて、信仰を無理強いする事ではないと考えました。

人はメリットがないと、食いついてきません。命令や、高圧的な指示で「あれやれ、これやれ」と言うよりも、子供にとつてそれが成程と思へるものであつて、それが魅力的なもので、向かう先にある目的が私と同じだったら積極的になつてきます。そうなる

には、信仰する目的を明確にして、その目的を魅力的に語る事を心がけるようにしてみました。また、子供に信仰を繋ぐ上でやつてはいけないと思つている事は、信仰生活を通して、不足事は子供には聞かせないようにする事です。妻と「私たちの未熟さからくる不足を子供に聞かせないよ」に気を付けなければならぬ」と、話し合つてゐます。

先ほど対等な関係で信仰を語り合える様な理想をお話させていただきましたが、一方で親として毅然とした態度も時には求められることも忘れてはいけないと思ひます。本当に子供の事を思うのであれば、時には厳しい事を言わなといけない事もあります。

これは子供の成長の過程で親が常にもつていなければならぬものだと思ひます。それは、先で困らないようにとの親心です。

以前、栄養士で勤めておられた方が、こころを病んで仕事に出てこれなくなつた事がありました。年を聞けば20歳そこそこで、短大で栄養士の資格をとつて栄養士として勤

めてくれました。大学で座学や実技も経験して、栄養士としての理想をもつて現場に來られたわけですが、現実には教科書通りにはいきません。

百名程の食事を毎日つくり、食事の前にはカロリーや栄養面を考えた献立づくり、食事以外にも厨房内の衛生管理や買い出し。詰所や大教会で女子青年を経験され毎朝・毎晩ご婦人さんの元で食事のお世話をして下さる方なら大丈夫かも知れません。何故大丈夫なのか？ それは食事のお世話をした経験があり、食中毒が出ないように衛生管理に気を付けて掃除をし、食事が終われば次の日の支度に至るまで準備をする経験をされるからです。

親は子供の行く末を案じて厳しい事も言ひます。また嫌がつても厳しい道を選択させ歩ませることもあります。しかし、子供はその時には理解できず反発しますが、実際にその状況に遭遇し親のお陰で乗り越える事が出来た先に親の厳しさに感謝するのではないのでしょうか？

私は学生の時に父から厳し

育てる丹精に徹しよう」と掲げられています。教祖140年祭の三年千日仕上げの年に、婦人会だけの活動方針ではなく、我々ようばくが男女問わず、次代を担うようばく育成の上で大切な事だと思っています。育つて貰うためには、まず私達自身が教えを抛り所として教えに沿った日々の成人を目指す歩みが基になると心に念じ、更に育成の上に精一杯邁進していきたいと思っています。結びに、せっかくの機会ですので、学校の紹介をさせて頂いて終わりにしたいと思っております。

おぢばには現在天理高校第一部・第二部の高校があります。

天理高校第一部は進学コース1類、特別進学コース2類、天理スポーツ・文化コース3類があり、生徒個々の特性に合わせたコース別指導に力を入れていきます。また、類ごとに特徴を生かすための取り組みをさせて頂いています。

天理高校第二部は、修業年限4カ年の夜間定時制課程普通科の学校です。特徴は全員が親元を離れて、寮や詰所で寝

起きを共にしながらの団体生活を送り、昼間は教会本部の各施設・各部署でつとめ（ひのきしん）をし、夕刻から御本部神殿での参拝に始まる学校での授業やクラブ活動に動んでいます。

一部二部共に、おぢばでまなび過ごす中に、それぞれに相适应しい環境の中で学習・寮生活・クラブ活動をし、仲間と共に成長する事ができます。一人でも多くおぢばの学校に送り出して頂き、教会・保護者・学校関係者で次代を担う方々の丹精を共にさせて頂きたいと思っています。

起きを共にしながらの団体生活を送り、昼間は教会本部の各施設・各部署でつとめ（ひのきしん）をし、夕刻から御本部神殿での参拝に始まる学校での授業やクラブ活動に動んでいます。

ようき会通信

▼網走地区ようき会

7月19日網走大教会にて、おたすけ委員会細木善信委員長をお招きし陽気セミナーを開催した。

講和では「しあわせはどこにあるのか」をテーマに、ユーモア溢れるお話を聞かせて頂き、参加者も楽しく聞かせて頂いた。その後、三つの班に別れて「しあわせ」について練り合いをし意見を交換した。

いのでは、育てられる側は戸惑うでしょう。まず、育てる立場の者が神一条の精神をしつかり定めて、教祖の親心に近づかしていただかなければなりません。育てる者が育つことによって、はじめて人を育てられるのであります。道に外れた人間思案で考えても、人は育てられないとお教えたいただきます。人が人を育てるのではないのであります。親神様のご守護によって、育つご守護を頂くように心をつくすことが肝心なのであります」とお話し下さいました。

『育てる側が教祖の親心に近づかせて頂き成人することによって、人を育てられる』と御教示くださいました。

教えに心を照らし合わせ、神一条の心で教祖の親心に近づかせて頂く努力をすることによって、自分自身が成人する。気がつけば、いつの間にか周囲との関係も良好になります。周囲の方々も、こんな人になりたいと、教えを乞い学び、成人への努力を重ねてくれるようになるのではないのでしょうか。

そして、そこには親神様の

御守護を頂かなければなりません。日々は御守護頂けるような歩みが大切だと教えて頂きます。いくら思いがあっても八つのほこりを使った親神様が望まれない言葉や行動、つまり、「道に外れたる心」で子供を育てようとしても、子供は育たないのです。これは何も子供だけではありません。関わり合う大人でも同じではないでしょうか？

真柱様は、学生担当委員会発足30年記念学生担当者大会にて、

逸話篇「人が好くから」のお話の一節に、「人が好くから神も好くので。人が惜しがる間は神も惜しがる。人の好く間は神も楽しみや。」とあります。よふぼくの土台として肝心なことは、人に好かれる人間に育てることです。とお話し下さいました。

この御逸話から学ばせて頂くことは、育成する役割に身を置くものが魅力的な存在となり、慕って貰えるような人でなければならぬし、それには『成る程』と思って貰える人となる日々の努力が何よ

りも肝心だということです。育てられる立場の方も「こんな人になりたい」と影響を受けて成長していく事が、育てる立場である我々の役割であると思います。

婦人会長様は第一〇六回婦人会総会にて『たがいたてあい』について、「たすけ合いは言うまでもなく、立て合うということも大変重要だと思う。『たてる』というのは相手を尊重すること。相手の立場になつて考え思いやる心、さらには人のために尽くすこと。これは自己中心的な考えとは反対の心づかいであるから、『陽気ぐらし世界』には欠かせないことだと思う」とお話し下さいました。

今、世の中は、個人情報保護され、個人の情報が広く人に伝わったり、他人に情報を知られる事嫌がられるようになっていくように思います。一方で、インターネットを介したSNS（ソーシャル・ネットワーク・サービス）が盛んに活用され、個人から発する情報を目にする事も増えてきました。

私の親の世代の方々は「言

葉では語らず背中を語る」であつたように思います。「一を聞いて十を悟れ」というように、細々と多くを語られなくとも、自分で悟る事を求められてきました。

今は思っている事を丁寧に伝えないと、なかなか伝わらなくなっているように思います。つかずはなれず、ほどほどの距離感を大切にしながら、日々は教祖に守っていただけるように陰ながらつなげて頂く事が大切だと思います。

そして、相手を敬う気持ちがなければ、伝えたい事も伝わらない様におもいます。それは、相手の立場にたつて親身に寄り添う気持ちを忘れてはいけないという事を婦人会長様から御教示頂いていると思います。

最後になりますが、真柱様第一〇七回婦人会総会でのメッセージにて『稿本教祖伝逸話篇』『子供の成人』を引用されて、教祖の仰せに、「分からん子供が分からんのやない。親の教が、隅々まで届いたなら、子供の成人が分かるであろ。」と教えてくださった。「育て

よう、丹精しようという相手があるように思っています。『一を聞いて十を悟れ』というように、細々と多くを語られなくとも、自分で悟る事を求められてきました。

今は思っている事を丁寧に伝えないと、なかなか伝わらなくなっているように思います。つかずはなれず、ほどほどの距離感を大切にしながら、日々は教祖に守っていただけるように陰ながらつなげて頂く事が大切だと思います。

そして、相手を敬う気持ちがなければ、伝えたい事も伝わらない様におもいます。それは、相手の立場にたつて親身に寄り添う気持ちを忘れてはいけないという事を婦人会長様から御教示頂いていると思います。

また、届かないところを謙虚に見直しする事も合わせてお示し下さいました。更にこの道を信仰する喜びを自信を持って伝えていけるように努力を惜しまず続けていきたいと思ひます。

婦人会の活動方針に「教祖140年祭に向かって 育つ努力、



網走地区ようき会委員長
細木 昇一

昼食では、流しそうめんをさせて頂く予定だったが、悪天候のため中止し、みんなでそうめんを食べて解散した。

参加者25名



札幌地区ようき会委員長
八重樫 隆

育成部便り

●婦人会

女子青年委員長講習会参加



網次分教会
安田 千晴 さん

今回、女子青年委員長講習会に参加させて頂きとても楽

しかったです。固いイメージがありました。班の方とも仲良くなれて充実した2日間になりました。

他の支部では、女子青年がいなかったり、集まらないなどの課題があるようです。ですが、網走はこれから繋いでいくことが可能な環境であるからこそ、もっと活動を頑張ろうと思えました。また、皆さんの活動する意欲はとても高いと感じました。

天理教の中で、女子青年ができることが沢山あると思います。なので、女子青年大会、教祖140年祭に向けてできることから取り組んでいきたいです。

婦人会長様の講話の中で、何事にも意味を見つけることが大切、とお話がありました。「どうして」と思うのではなく、自分が委員長になった意味を見つけて活動していこうと思いました。

また、女子青年委員長講習会は、いろんな人にもっと経験してもらいたいと思ひました。

動 静

▼年祭

陽光分教会所属・横川隆俊の霊様の5年祭が7月21日、自宅にて桐谷善広・陽光分教会長祭主のもと執行された。

7月人のご守護

○初席者

（4名）

旭 網 橋 本 侑 哉

實 東 小 野 寺 義 直

實 東 小 野 寺 貞 子

誠 網 池 部 眞 也

○中席者

（8名）

直 轄 瀨 川 ひかる

網 栄 三 澤 富 男

實 東 小 野 寺 千 草

實 東 小 野 寺 眞 央

徳 道 奥 村 謙 一

網 新 新 川 來 暉

誠 綱 田 中 雄 也

網 次 安 田 桃 花

○修養科修了者

（1名）

網 新 新 川 千穂子

○別席傍聴願

（2名）

○をびや許し願

（1名）

大教会7月の動き

1日 役員会会議

3日 婦人会委員会

5日 おはなし食堂。直轄

世話人会
縦の伝道日
網走支部例会会場
役員会会議
教祖140年祭網走おたすけ委員会会議。布教部例会。育成部部会。婦人会例会
月次祭。みちのだい育み塾。役員会会議。
連絡会
教会長夫妻練り合い。修養科事前研修会よろこびセミナー（15日まで）
網走地区ようき会ようきセミナー会場
こども会。縦の伝道日
会長、札幌方面直轄信者まわり（23日まで）こども会
会長、おぢばがえり。詰所23会
会長、本部神殿奉仕つとめる

立教188年人のご守護心定め			
初席者	ようぼく	修養科修了者	教 人
51名	23名	18名	6名
成 果 （7月末現在）			
14名	5名	4名	0名

25日 五季御礼
26日 本部月次祭遙拝。会長、教区主事会出席。結城和広役員、本部神殿奉仕つとめる
27日 藤山重善役員、本部神殿奉仕つとめる。こどもおぢばがえり団体出発（8／3戻り）。縦の伝道日
29日 大教会一斉活動日

仕上げの年
諭達の実動十万件
年祭当日をうれしい心で迎えよう

実動件数
130,103件
（7月11日現在）

立教188(令和7)年人のご守護成果表(7月末現在)															7月 月次祭 7/12(土)																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																		
教 会 名		初 席	中 席	よう ぼく	修 卒	教 人	婦 参 者		教 会 名		初 席	中 席	よう ぼく	修 卒	教 人	婦 参 者		〈参拝者数 約80人〉																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																															
							当 月	累 計								当 月	累 計	神 殿 講 話	賛 者	指 図 方	扨 者	祭 主	祭 員	祭 典	役 割	前 半	後 半																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																						
直 轄	美 幌	女 満 別	斜 里 町	釧 厚	武 士	常 呂	旭 網	御 料	東 藻 琴	陽 光	呼 人	誠 陽	網 栄	實 東	東 網	宗 稚	誠 央	常 道	徳 道	満 金	網 安	オホーツク						栗 沢	徳 元	網 盛	網 新	網 葉	網 陽	誠 綱	網 次	網 昇	勇 走	結 城	桐 藤 谷	大 教 会 長	祭 員	祭 典	役 割	前 半	後 半																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																				
2	11	1				12	69	3	4	1	1	11	6	31	4	11	5	0	15	7	3	4	27	7	12	3	6	1	3	4	1	12	33	4	7	1	15	2	26	3						11	2	18	11	2	12	1	8	11	2	12	1	8	33	9	9	61	95																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																		
															詰 所																	61		95																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																															
初 席		中 席		ようぼく		修 卒		教 人		婦 参 者		初 席		中 席		ようぼく		修 卒		教 人		婦 参 者		初 席		中 席		ようぼく		修 卒		教 人		婦 参 者		初 席		中 席		ようぼく		修 卒		教 人		婦 参 者		初 席		中 席		ようぼく		修 卒		教 人		婦 参 者		初 席		中 席		ようぼく		修 卒		教 人		婦 参 者		初 席		中 席		ようぼく		修 卒		教 人		婦 参 者		初 席		中 席		ようぼく		修 卒		教 人		婦 参 者		初 席		中 席		ようぼく		修 卒		教 人		婦 参 者		初 席		中 席		ようぼく		修 卒		教 人		婦 参 者		初 席		中 席		ようぼく		修 卒		教 人		婦 参 者		初 席		中 席		ようぼく		修 卒		教 人		婦 参 者		初 席		中 席		ようぼく		修 卒		教 人		婦 参 者		初 席		中 席		ようぼく		修 卒		教 人		婦 参 者		初 席		中 席		ようぼく		修 卒		教 人		婦 参 者		初 席		中 席		ようぼく		修 卒		教 人		婦 参 者		初 席		中 席		ようぼく		修 卒		教 人		婦 参 者		初 席		中 席		ようぼく		修 卒		教 人		婦 参 者		初 席		中 席		ようぼく		修 卒		教 人		婦 参 者		初 席		中 席		ようぼく		修 卒		教 人		婦 参 者		初 席		中 席		ようぼく		修 卒		教 人		婦 参 者		初 席		中 席		ようぼく		修 卒		教 人		婦 参 者		初 席		中 席		ようぼく		修 卒		教 人		婦 参 者		初 席		中 席		ようぼく		修 卒		教 人		婦 参 者		初 席		中 席		ようぼく		修 卒		教 人		婦 参 者		初 席		中 席		ようぼく		修 卒		教 人		婦 参 者		初 席		中 席		ようぼく		修 卒		教 人		婦 参 者		初 席		中 席		ようぼく		修 卒		教 人		婦 参 者		初 席		中 席		ようぼく		修 卒		教 人		婦 参 者		初 席		中 席		ようぼく		修 卒		教 人		婦 参 者		初 席		中 席		ようぼく		修 卒		教 人		婦 参 者		初 席		中 席		ようぼく		修 卒		教 人		婦 参 者		初 席		中 席		ようぼく		修 卒		教 人		婦 参 者		初 席		中 席		ようぼく		修 卒		教 人		婦 参 者		初 席		中 席		ようぼく		修 卒		教 人		婦 参 者		初 席		中 席		ようぼく		修 卒		教 人		婦 参 者		初 席		中 席		ようぼく		修 卒		教 人		婦 参 者		初 席		中 席		ようぼく		修 卒		教 人		婦 参 者		初 席		中 席		ようぼく		修 卒		教 人		婦 参 者		初 席		中 席		ようぼく		修 卒		教 人		婦 参 者		初 席		中 席		ようぼく		修 卒		教 人		婦 参 者		初 席		中 席		ようぼく		修 卒		教 人		婦 参 者		初 席		中 席		ようぼく		修 卒		教 人		婦 参 者		初 席		中 席		ようぼく		修 卒		教 人		婦 参 者		初 席		中 席		ようぼく		修 卒		教 人		婦 参 者		初 席		中 席		ようぼく		修 卒		教 人		婦 参 者		初 席		中 席		ようぼく		修 卒		教 人		婦 参 者		初 席		中 席		ようぼく		修 卒		教 人		婦 参 者		初 席		中 席		ようぼく		修 卒		教 人		婦 参 者		初 席		中 席		ようぼく		修 卒		教 人		婦 参 者		初 席		中 席		ようぼく		修 卒		教 人		婦 参 者		初 席		中 席		ようぼく		修 卒		教 人		婦 参 者		初 席		中 席		ようぼく		修 卒		教 人		婦 参 者		初 席		中 席		ようぼく		修 卒		教 人		婦 参 者		初 席		中 席		ようぼく		修 卒		教 人		婦 参 者		初 席		中 席		ようぼく		修 卒		教 人		婦 参 者		初 席		中 席		ようぼく		修 卒		教 人		婦 参 者		初 席		中 席		ようぼく		修 卒		教 人		婦 参 者		初 席		中 席		ようぼく		修 卒		教 人		婦 参 者		初 席		中 席		ようぼく		修 卒		教 人		婦 参 者		初 席		中 席		ようぼく		修 卒		教 人		婦 参 者		初 席		中 席		ようぼく		修 卒		教 人		婦 参 者		初 席		中 席		ようぼく		修 卒		教 人		婦 参 者		初 席		中 席		ようぼく		修 卒		教 人		婦 参 者		初 席		中 席		ようぼく		修 卒		教 人		婦 参 者		初 席		中 席		ようぼく		修 卒		教 人		婦 参 者		初 席		中 席		ようぼく		修 卒		教 人		婦 参 者		初 席		中 席		ようぼく		修 卒		教 人		婦 参 者		初 席		中 席		ようぼく		修 卒		教 人		婦 参 者		初 席		中 席		ようぼく	